

インタビューの相互行為におけるわからなさの可能性

安田裕子

(京都大学)

京都大学の安田です。私自身、インタビューの手法を用いて研究しています。その立場から、本日、お三方、滑田さん、福田さん、木戸さんが、インタビューの相互行為におけるわからなさに着目したというのがすごくおもしろくて、興味深く聞かせていただきました。

まず、そのわからなさを「違和感」と私は表現しました。発表者の皆さんはそれぞれ、「スムーズじゃない」、「ずれ」、「溝」などという言葉を使われていたかと思います。

インタビューをしているときに、「ああ、わかる」という感覚もあると思うんですね。そこから聞き込んでいけるような感覚、とでもいいでしょうか。そうした状況では、わかるということがありながら、さらに「分析が進む」場合があります。

一方で、時に出てくる「何だかよくわからない」ということに今回着目されたわけですが、そのときすごく焦ると思うんですね。対象あるいは現象についてわかりたいという思いがあって、インタビューをし、時間を費やしてその文字起こしをして分析を進めようとしているのに、何かよくわからないとなると、非常に焦りを感じるのではないかと思います。ただやはり、最初に滑田さんがおっしゃったように、インタビュアーとインタビューーという調査する者とされる者といった関係性に加え、個としての感覚の違いもあって、そうした二重の異なりがインタビュアーとインタビューーの間に存在するなかで、わからなさはある意味当然起こってくるものだとも思うのです。

インタビュアーとインタビューーという立場の違いに関し、知識体系が違いますし、また、インタビュアーは専門家としてもつ意図なり目的なりがあ

るわけですね。そこで研究目的にもとづいてある現象を明らかにするために、研究者としての自らの視点を大切にしてくださいをもってインタビューに臨むからこそ、インタビューのやりとりのなかで「あれ？」という疑問や違和感がでてくるのだともいえるでしょう。一方で、インタビューの方、何かを話そうと思ってインタビューを引き受けたのだけれども、インタビュアーとのやりとりのなかで、焦点をあてて聞かれる内容にとまどいを感じたり、「ちょっとそれについては話せない」と思ったりなどと、話すことに抵抗が生じる場合もあるだろうと思います。

また、個と個の違いに着目したとき、とりわけ性別という属性が影響を及ぼすことがあるでしょう。ジェンダーが問題になってくるわけですね。木戸さんの化粧の研究や滑田さんの家事分担の研究では、やはり、ジェンダーの視点が欠かせないのではないのでしょうか。そして、個別の経験の影響も見過ごすことはできないでしょう。例えば、福田さんの研究ですと、インタビューは病いを経験し、インタビュアーは病いを経験していないという歴然とした経験の異なりがあるなかで、インタビューがなされています。また、役割や立場の違いもあるでしょう。福田さんの研究では調査という状況設定がなされていますが、やはりそこには、支援する側と支援される側、という立場の違いがあるのではないのでしょうか。こうしたいくつもの違いが存在するのですから、「ずれ」が生じて当然だといえるでしょう。

また、インタビューに際し、「当事者に聞く」というように、インタビューを表現する言葉として「当事者」という表現を用いますが、インタビュアーもある種の当事者性を有しているといえるでしょう。インタビューが、その経験に関する当事者性をもつ一方で、インタビュアーは、その特定のトピックを扱う研究に向き合うという点で、当事者性をもっていると考えられます。インタビュアーとインタビューが、ずれと重なりを含む当事者性を有しながら、インタビューでやりとりがなされているのです。

こうした状況下で、やはりインタビュアーはインタビューの語りを理解しようと試みるわけです。そして、そうして「ずれ」や「違和感」を埋めていこうとするプロセスでさらなる気づきがあり、また、埋めようにも埋まら

ないというジレンマのなかでの気づきもあるでしょう。今回のワークショップでその可能性に着目されたことを、とても興味深く思いました。少し前段が長くなりましたが、これから、それぞれのご発表に対してコメントと質問をさせていただきます。

発表された順にさせていただきます。まず、福田さんのご発表についてです。福田さんは、ご自身の研究について、調査という文脈として発表されていました。一方で私は、これはいったい調査なのだろうか？と疑問をもちました。つまり、インタビューの生活の質の改善に向けて、生活空間のどの部分が当人にとって重要なのかを対話的なやりとりを通じて明らかにするという、インタビュアーによる支援的なかかわりが含まれているのではないかと思ったのです。

初めてお会いする方には、SEIQoLをいきなり実施しないということでしたが、実際のところ、行うことができないのだろうと思いました。初対面ではそういったかかわりはとても難しく、何度か顔を合わせるうちにできるようになるという点も、支援的な要素が多分に含まれていることを示しているのではないのでしょうか。そして、SEIQoLの実施においては、インタビュアーが支援者の役割を担っている。もちろん、支援する側から支援される側へという一方的なものではないでしょう。実際にはインタビュアーとインタビューーによる相互的な対話がなされており、そのプロセスで変容・転換が起こっているのです。つまり、支援的な役割がインタビュアーとインタビューーの間で移行しながら、インタビューが深まっていっているのだと考えられます。たとえば、マニュアル通りに会話がスムーズに展開しない場合、福田さんが、プラスアルファの問い直しや拡張の問いなどを差し挟んでいかれるということでした。それによって会話が膨らみ、悩みが共有され、最終的に Cue が焦点化され着地点をつかめたのだという。最初はお互いに調査として臨むのかもしれませんが、インタビュアーとインタビューーの実際のやりとりそのものは、とても支援的なプロセスであると思いました。

基本的には、SEIQoLは、その人がどのような生活をしているのかという生活の質を明らかにし、ひとつのQOL尺度をつくるための調査なのです。

ね。ですので、スムーズな対話が非常に重要となってくる、ということでした。ただし、ここで明らかにされたように、会話がスムーズでないというところから、とても支援的なやりとりが生まれたということは重要なことだと思います。そのうえで改めて、スムーズな流れを通じてできたSEIQoL尺度と、スムーズには展開しなかったやりとりを通じてできたSEIQoL尺度について、それぞれ短所と長所としてどのようなことがあげられるだろうか、と思いました。これが福田さんへの質問です。

次に、滑田さんのご発表に関してです。滑田さんが企画趣旨として最初に言われたように、聞きたいことが聞けてないことがわかると、とても焦ると思います。そんなとき、ああ、このインタビューは研究に使えない…と、つい思ってしまいます。しかし、もう使えないわとあきらめることなくインタビューデータと向き合うなかで、なんらかの気づきがあり、大きな転換が見えてきたのですよね。滑田さんの場合、「話し合い概念のずれ」を発見されたのであり、それはとても意義深いことであったと思います。

滑田さんはインタビューアとして、夫婦間で家事分担の話し合いがあっただろう、という前提でインタビューに臨まれたのですが、一方で、インタビューイは、話をしなくても普通に夫婦間で家事分担がなされていた、と語られた。つまり、インタビューアとインタビューイのやりとりは根本的にずれていて、ちゃんとかみ合っていなかった、ということでした。こうしたことに気づくことによって、それでは行動について尋ねてみようというように、インタビューの焦点を軌道修正されたこと自体、とても興味深く思いました。

さて、滑田さんは、「(家事分担について)話し合いがなかったと語ること」＝「(家事分担について)問題がなかったというアピール」であると、分析されていました。そこをもっと深く掘り下げていくと、とてもおもしろいのではないのでしょうか。例えば、事例1のインタビューイについて、当時はこうする(夫が働き、妻が家を守る)のが普通だったという語りがありました。なるほど、そうだったのかもしれないです。ただ思うのは、当時の社会背景を考えると、ジェンダーが関係しているのではないかと。当時は、夫が働きに行って妻が家を守るという構図が当然だったのではないかと思います。そ

の後少しずつ変化し、今や、夫婦で家事分担をするという認識は特別なものではなくなりました。しかし、その当時のことを問われて今ここで語るときに、あの時はそうする（家事分担について敢えて話し合う）夫婦なんていなかった、夫が外で働き妻が家を守るのが普通だったのだと、当時の行為を意味づける語りになったのでは、と思うのです。他方で、家事分担に関して語られていた部分が本当に全くなかったのか、という疑問ももちました。もう少し踏み込んだり切り口を変えたりして、語りデータの再分析をしてみてもいいのでは、という提案です。

このことも含めて、滑田さんには次のことをお尋ねしたいと思います。滑田さんは、夫婦あるいは妻にインタビューをされましたが、夫婦2人を対象にする場合と、家事を主として担っていた妻1人を対象にする場合とでは、語り出される内容が違ってくるのではないか、と思いました。このことについて、滑田さんはどのようにお考えでしょうか。インタビューの仕方に関する今後の展望も含めて、教えていただけますでしょうか。

最後に、木戸さんのご発表についてです。木戸さんは先行知識がインタビューに与える影響というタイトルで発表されました。インタビュアーとインタビュイーとの間で、先行知識の違いは多かれ少なかれあるでしょう。木戸さんはこれまで研究をされるなかで、化粧概念について明らかにしてこれらだと思っておりますが、ビューティフィケーションとかラプチャーケアとかアドバンスドケアというように、全部で4つに概念区分されていましたよね。このことについて、化粧＝ケアなのだろうか？ということが、私がひとつ気になった点です。

化粧概念をもつ専門家と、それをもたない非専門家との間で、認識の違いが明らかにあるなかでのインタビューだったかと思えます。提示されたインタビューの語りを見ると、インタビュイーに抵抗があったことが明らかにわかりました。逆に、インタビュアーが、どこかしら同調しているように感じられる語りもありました。たとえば、最後に木戸さんが触れられたように、「スキンケアとまゆ毛を剃ることは一緒ですよ」とインタビュアーが尋ねたときの、インタビュイーの「確かにそうですよね」という語りがありました。

たります。無理に同調しているような、それでいて半ば不服であるような、そうした雰囲気を私も感じました。また、インタビューーは、「確かにそうですね」という語りをインタビューーに返しているのですが、同時に自分自身にも語りかけているのだということでした。「なんだか恥ずかしい」という思いから、まゆ毛を剃ることはスキンケアなのだと、自分自身に言い聞かせているのですよね。自分に言い聞かせると同時に相手にも伝えている。その意味では、インタビューーへの返答に、自分は化粧しているのではないという主張や、化粧していると思われることが嫌だという気持ちが含まれているのだらうと思いました。たとえまゆ毛を剃っているにしても、それが他者にあからさまにわかってしまうことがすごく嫌なのだ、ということなのでしょう。

このことを最初に述べたことにつなげていくと、それでは、化粧ではなくケアと認識されるのならよし、とインタビューーは考えていたのだらうか、と思い至りました。化粧に関するインタビューーにおいて、インタビューーである男性自身の化粧やケアに対する認識が、男性がインタビューーとして語る内容に多分に影響しており、その結果、インタビューーとインタビューーとの間に「溝」ができるという図式があったのではと思います。スキンケア、ボディケア、メーキャップ、ヘアケア、ヘアメイク、フレグランスというように、広義の化粧概念にもいくつか区分があるということですから、インタビューーとインタビューーがそれぞれ、化粧についてどのように認識し、概念区分のどの次元で受け答えをしていたのかということは、とても気になるところです。

また、もうひとつ、インタビューーがインタビューーである木戸さんの存在をどのように認識していたか、ということも気になりました。このことは、2つの観点から考えることができるでしょう。ひとつはジェンダーの観点であり、もうひとつは専門家-非専門家という関係性の観点です。まず、前者についてです。インタビューーは、購入した化粧品を人に見られるのは、相手が男性であっても女性であっても同じように嫌だと語ったことが報告されていましたが、相手の性別によらないということ、果たして本当にそうなの

だろうかという疑問が残りました。それはそのまま、インタビューにもあてはまる疑問となりました。男性であるインタビューイが、異性であるインタビュアーに語っているのだと、意識する面がなかったのかどうか。インタビュアーとインタビューイとのジェンダー差がインタビューに及ぼす影響に関する問いです。後者については、非専門家である自分が専門家に語っているのだという意識が、インタビューイになかったかどうか、という問いです。これらのことを、そのまま木戸さんへの質問とさせていただきたいと思います。女性であり専門家である木戸さんの立ち位置を、男性であり非専門家であるインタビューイがどのように認識し、やりとりが構成されていたのかということについて、木戸さんはどのようにお考えでしょうか。

以上述べてきたように、化粧の研究を積み上げてこられた木戸さんの立ち位置から、こういった、まさに溝ができた認識されたインタビュー場面での対話をとりあげ、何かを捉えようとされていたこと自体、とても興味深く思い、聞かせていただきました。さらにそこからもう一歩踏み込んで、単におもしろいとどめてしまうのではなく、溝ができたやりとりを取り上げることによって何を明らかにしようとしたのかについても、お尋ねしたいと思います。また、そのなにかしかを捉えようとするために、インタビューでしてきた工夫やこれからできる工夫があるとすれば、一すでに随所に盛り込まれていたかもしれませんが—それについてもおうかがいしたいと思います。以上です。